

◆伊藤洋二 選 ～「誦んじたい俳句88」～

鷹羽狩行(監修) 片山由美子(文) 石飛博光(書) 二〇〇五年 日本放送出版協会

いくたびも雪の深さを尋ねけり

正岡子規

一九四六年、俳句は「老人や病人が余技とし、消閑の具とするにふさわしい」ものとして、強いて芸術の名を使うのであれば、「第二の芸術」に区別すべきとの第二芸術論争があった。時に、子規先生がご存命であれば嘆かれたことと拝察する。何たる暴言であろうか。俳句には山本健吉の唱えた「滑稽・即興・挨拶」の三命題あり。会員諸君、励もうぞ。

雪解川名山けづる響かな

前田普羅

随筆とは文学の一形式で、筆者の体験や知識をもとに、その感想・思索・思想をまとめて、小説や評論のように、五・七・五などの韻律や句法にとらわれずに書かれた文章のことである。有り難きかな、この随筆もどき悪筆を掲載してくださる素晴らしい編集長に感謝しつつ一句を。「老春の躊躇ひけづる俳句かな」。

囀をこぼさじと抱く大樹かな

星野立子

今年、卒業後五十年の同窓会のカラオケ世話人となった。クラス対抗で囀るにあたっての選曲作業も、これまた楽し。「高校三年生」「いつでも夢を」「修学旅行」他二曲。締めは「今日の日はさようなら」と決定。ラジカセを聴きながら物忘れの「古希鳥」、達の為に歌詞カードを作る。作りながら、不覚にも涙が零れる。そうだ、今宵は行きつけの「止まり木」、へ行こう。

葉桜の中の無数の空さわぐ

篠原 梵

何通りかの散歩コースを実査し、三つに絞る。①里山②川沿い③田園。昔懐かしい桜が迎えてくれる。随分大きくなったものだ。植物の肥料の三要素は窒素、リン酸、カリウムと習ったが、もう一つ大切な肥料がある。「見肥」である。見つめられると美しくなるそうだ。さあ公平に声をかけよう。勿論心の内で。葉桜になるまで彼女達と無数の空を眺めよう。

足もとはもうまつくらや秋の暮

草間時彦

春日八郎さんの、「街の燈台」（作詞：高橋掬太郎先生 作曲：吉田矢健治先生）。
♪よるべなければ なお淋し 街のあかりよ なぜうるむ 愛の燈台 照らしておくれ せめて希望の わが夢を♪ これぞ名曲。この曲を聞くとサラリーマン時代を思い出す。あれはつるべ落としの秋の暮。一日で終わらせる心算の出張の仕事が片付かぬ。宿も取っていない。見知らぬ街の駅前に佇み「明日はきっと上手くゆくさ」と独り言。赤ちょうちんの灯が微笑んでいたっけなあ。

銀杏散るまつたゞ中に法科あり

山口青邨

立川志の輔師匠の古典落語に「帯久」という大岡裁きの一編があり、証文なしの百両の貸し借りを巡るお断で何とも素晴らしいオチがある。庶民の味方となって人情味あふれる見事な裁判は、大岡政談として語られていて、落語&浪曲等々、演芸ファンの筆者には堪らない。「見事と言うほどではないのだ。相手が帯屋だから少々きつめに締め上げておいた」。

◆日根野聖子 選

前回ご紹介させていただいた、半呆子先生こと、池田亮二先生の句集のタイトルは、「戯句洒句」の間違いでした。「酒」とご紹介していましたが、「洒」です。訂正して、お詫び申し上げます。今回も第九句集「戯句洒句」より。

梅干煮干し沢庵ぬか漬け文化遺産

和食がユネスコ無形文化遺産に登録されたのは、平成二十五年の十二月。和食の特徴として、食材の多様さ、栄養のバランス、自然や季節を表現していること、年中行事とのつながり、が挙げられている。

自身の食生活を振り返って、どのくらいの頻度でこの特徴を備えた食事をしているだろうかと反省。

一年坊主の未来重たきランドセル

一年生の背中は、ランドセルだけでなく、周囲の大人の期待や、日本の未来を背負っているのかも。子どもの六人に一人が「貧困」で、先進国の中でも最

悪といわれる日本。ランドセルにぎっしり詰まっていて欲しいのは夢や希望なのに。

幽霊も迷うや街の様変わり

久しぶりに通った商店街や道路で空き地を見つけるが、そこが以前にどんな店だったのか、家だったのか、どうしても思い出せない。そんな経験は誰しもあるはず。道が広がり、コンビニが乱立。そこへ全国展開の大型店が進出というケースもよくある。タバコ屋も駄菓子屋も金物店も無くなった。街のおもかげはすっかり無くなり、地名も変わってしまった。これでは、ご先祖様も化け猫も、目印を見失って迷ってしまう。